

「生成」としての保育者存在

保育者になることの意味の考察

榎沢 良彦

はじめに

日常、私たちは「保育者であること」を職業的役柄としてとらえていることが多い。それは、例えば、親が自分の子どものクラス担任と園外で出会ったときでも、その人を「先生」と呼ぶことに端的に現れている。

このように、保育者を一つの職業としてとらえる限り、保育者であることは、子どもの発達について専門的知識を有していることであるとか、ピアノが弾けることであるとか、子どもの世話をする技術に優れていることである等と考えられる。しかし、このような保育者が所

有すべき条件は本質的なものではない。なぜなら、たとえピアノが弾けなくとも、子どもを保育することはできるからである。

「保育者であること」は人間の可能的在り方の一つなのであり、他者との関係の内に生きる一つの生き方なのである。そのことを見失うと、「保育」というものが単なる技術の問題（保育者が子どもを思うように操る問題）に墮する危険性が生じる。

私は今日まで「保育者であること」の本質を探究してきたのだが、私たちが「保育者である」前に「保育者に

なる（保育者へと生成する）」段階が存在する。そこで、本稿では、「保育者であること」と密接に関連している同次元の問題である「保育者になること」の本質と意味を明らかにすることを試みることにする。

ところで、この問題を明らかにするには、一個の人間が保育者になる事態、保育者になる現象に私たちが立ち会わなければならない。言い換えれば、保育者になるという「体験相」を注視しなければならないのである。そのため、私自身が保育実践を行ない、その体験を反省的に考察することにより、「保育者になること」の意味を明らかにするという研究アプローチをとることにする。実際に考察の素材とするのは、私の体験を定着した「私自身の実践記録」である。因に、このようなアプローチによる研究を私は「実践的研究」と呼ぶことにしている。

一、保育者へと生成する過程

(一) S男、Y子と私の関わりの実際

本稿では二人の知恵遅れの児童（S男とY子）を事例として取り上げるのだが、特に問題にされるのはこの二人の児童と保育者である私との関わりである。そこで、この関わりを理解するための前提として、二人の児童と私との関係を簡単に述べておこう。

私はこの二人の児童の担任の一人であり、よく一緒に遊んでいる。したがって、この二人と私とは「親しい間柄」にあると言ってさしつかえない。

*

〔記録1〕（S男とY子とI先生のいる校長室に私が入って行く）

校長室で、I先生（女性・S男とY子の担任）がS男とY子の相手をしていた。I先生の両側にS男とY子が座り、S男はお弁当を食べていた。私は手が空いたので、三人のいる校長室に入って行った。

S男は椅子に座り、ニコニコと楽しそうな表情でお弁当を食べており、Y子も穏やかな表情をしており、校長室は「和やかな雰囲気」に満ちている。私は少しのちゅうちゅ

もせず、校長室に入っていく。S男とI先生の「好意的な視線」が私に向けられ、私を迎え入れてくれる。Y子はまだ私に気付いていない。私は笑みを浮かべてS男の正面辺りに座る。そして「Y子ちゃん、こんには」と身を乗り出すようにしてY子に挨拶する。I先生の方に向いていたY子は私に気付き、こちらに振り向くと、ニコッと微笑む。これでこの部屋の三人すべてが私の存在に気付き、私を受け入れてくれたのだ。

*

〔記録2〕（私がI先生と交替してS男と遊ぶ）

私はI先生から、後で自分と代わってS男についてくれるようにと頼まれていた。

S男とI先生は校庭の中程で、古タイヤのロープウェイで遊ぼうとしていた。私は広間からI先生に「Y子が来ました」と大きな声で知らせる。I先生は「それじゃ交替するわ。Sちゃんに付いてやって」と答える。私は明るい気分二人に近づく。I先生はS男に「Sちゃん、今度は榎沢先生が遊んでくれるって。よかったわね」と話しかける。S男は「わかった」と言うように軽くうなずく。S男

と私はいつも一緒に遊んでいるので、I先生と私が交替することをS男は快く認めてくれるだろうと思っはいたが、実際にS男がうなずいてくれたことで、私はほっとした。

S男はタイヤに座り、私にロープを持って動かすようにと頼む。私は「じゃ、引っ張るぞ。ヨイショ！ヨイショ！」と、多少おどけた調子で答える。「行くぞ！」と言ってロープを緩めると、タイヤが低い方へと滑って行く。S男は嬉しそうに笑っている。私は「よし、また行くよ」と積極的にS男に話しかける。私は明るい気持ちで意欲的になっているので、積極的に行動してしまうのだ。それに、S男の嬉しそうな笑顔が私をさらに楽しい気分にしてくれる。

(二) 保育者へと生成する過程

以上に提示した二つの事実に基づきながら、私たちが「保育者」へと生成する過程を考察するのだが、以下に取り出す諸項がすべてこの順序で生じたり、作用するわ

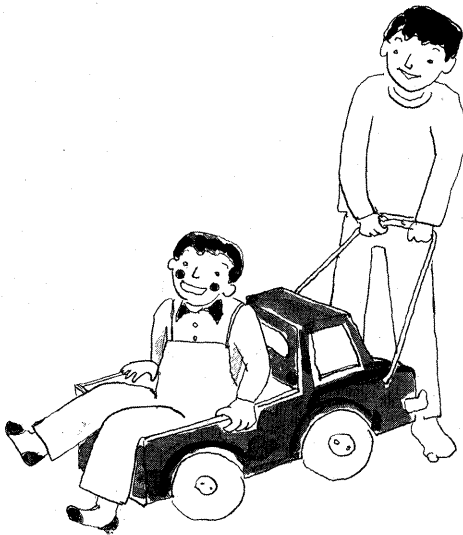
けではない。論理的には順序があっても、現象的には同時に生じるということもあるのである。したがって、以下の諸項は「保育者生成の諸契機」と考えてもらいたい。

① 実現されていない投企された役割存在（未在の役割存在）

私が前提にする考え方は、「子ども」とか「保育者」という概念は関係論的概念^①である、ということである。すなわち、私たちは子どもとある実的な関係を結ぶことにより、初めて「保育者」なる役割を担った存在^②になるのであり、同時にまた子どもも「子ども」なる役割を担った存在になるのである。

ところで、現実においては、私たちは実際に子どもと関わる（関係を結ぶ）以前から、保育的状況に身をおくことで——ときには出勤途中においてさえ——すでに、「保育者」であろうとしている。すなわち、自己の存在可能の一つとして保育者存在を投企している（自己の在

り方を未来に向かって投げ企てている）のである。しかし、これだけでは私たちはまだ保育者ではない。私が保育者でありうるためには、私に保育者であることを期待し、私の投企を承認する子どもがいなければならない。すなわち、子どもとの間に実的な関わりが生じるまでは私の投企は空虚なままであって、充実しないのである。



したがって、この段階では私たちは△未来の保育者存在✓を生きている、と言えるだろう。

例えば、「記録1」で校長室に入って行くようにしている私は、この時点ではこの子どもとも関わっていないのだから、保育者ではない。しかし、わたしは校長室にいるS男とY子を念頭に置いており、この二人と関わるであろうことを予期している。すなわち、私は現実には保育者ではないが保育者であることを投企しているのである。それゆえ、私は△未来の保育者存在✓を生きているのである。この事態は「記録2」においても同様である。

この未来の保育者存在を生きる、という事態は初めて保育実践をする人を見ればよく理解できるだろう。実践経験の乏しい実習生は実践現場に臨む前から、「子どもに会ったらこんな風に話しかけよう」とか、「子どもとうまく遊べるだろうか」等と考え、期待と不安にとらわれ、緊張してしまうものである。このように思ってしまふこと自体、実習生が保育者としての自己の未来の姿を

予想していることを意味するのであり、それはまさしく、未来の保育者存在の状態を生きていることを意味するのである。

② 経験により物象化された「子ども存在」と「保育者存在」

私たちが保育者へと生成して行くことを可能にする一つの契機が△役割存在の物象化✓である。これは、役割存在をあたかも「事物存在」と同じように、他者との関係ぬきに、「それ自体で存在するもの」であるかのように思ってしまうことである。³⁾

私たちの日常的で素朴な意識においては、この「物象化」という事態がごく自然なこととして起きている。例えば、私たちは保育者が毎日習慣的に行うべき仕事をイメージとして思い浮かべることができる。イメージ化された仕事は子どもとの実的関わりから切り離されたものである。すなわち、それは物象化の所産である。私たちの日常的な行動の多くは物象化されたものなのである。⁴⁾

ある関係を物象化するという意識の働きは保育者においても生じる。保育者はこれまで繰り返し自分が「保育者」として生きてきた経験（子どもと関わり合ってきた経験）から、自分はいつでも「保育者」であり、子どもはいつでも「子ども」であると思ひ込んでしまう。言い換えれば、「子ども―保育者関係」が常時存在し続けているかのように思ってしまうのである。「子ども―保育者関係」を物象化してしまつた保育物は、私を「保育物」として規定してくれる子どもの存在と関係なく、保育者としての役割を、それがあたかも「もの」でもあるかのように、自分が所有していると思ってしまうのである。

例えば、「記録1」において私は何のちゅうちょもせずS男とY子のいる校長室に入つて行つた。それは私が二人の担任であり、これまで二人と親しく関わつてきたという経験があるために、この場面でも当然私を受け入れてくれるだろう（保育者として認めてくれるだろう）と思つていたからである。すなわち、二人との間に実的

な関係が生じる前に、二人と私との間に「子ども―保育者関係」が成立しているかのように思つていたからである。私は、S男とY子は「子ども存在」であり、私は「保育者存在」であることをすでにある程度前提にして行動していたのである。

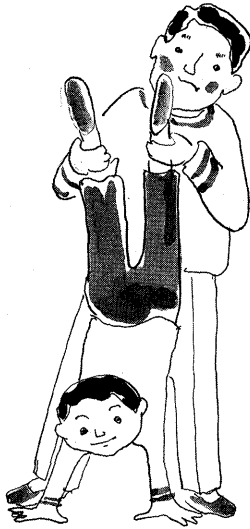
この事態は「記録2」においても同様である。この場面では、I先生と私が交替することをS男が認めてくれるだろう、と私は思つていた。これまで私は何度となくS男と遊んできたので、いつでもS男は私と遊んでくれる（いつでもS男は私にとって「子ども存在」である）とほとんど確信していたのである。このように私が思えるのは、「子ども」と「保育者」という役割存在を、すでに成立しているものとして、私が物象化してとらえていることによつていのである。

日常的な保育実践においては、この△役割存在の物象化√・△関係の物象化√というものが、私たちが子どもに関わつて行くことをある程度支えてくれている、と言えるだろう。すなわち、保育者は、これまでの保育者と

しての経験に支えられて、新たな自己投企（新たに保育者であろうとすること）を繰り返しているのである。

③ 受容的雰囲気感知

私たちが保育者たらんと投企し、子どもと関わろうとする際、身体的実存の次元（前意識的次元）において、



それを支えているのが「受容的雰囲気」である。私たちは子どもが私を受け入れてくれるか否かを（保育者になれるか否かを）、「雰囲気」として感知するのであり、この「受容的雰囲気」に支えられて保育者としての自己投企を維持することができるのである。

〔記録1〕において、私が入って行くところとしていた校長室は「和やかな雰囲気」に満ちていた。そこにいる三人は穏やかな表情をして寛いでいた。そのような身体在り方は「世界に対する親密性」を示すものであり、第三者の到来を受け入れる用意のあることを意味しているのである。このような他者を受容する態度が「雰囲気」としてその場に漂い、それを私の身体が感知したのである。それゆえ、私も寛いだ気分が安心して（保育者になれると期待して）校長室に入って行けたのである。

このように、「受容的雰囲気」は保育者としての自己投企の実現を、より確実なものと思わせてくれるのである。

④ 子どもとの出会いにより実現される役割存在（保育者の生成）

〔記録1〕で△未来の保育者存在√を生きていた私が△現在の保育者存在√になったのは、校長室にいた三人の「好意的まなざし」（△受容的まなざし√）に出会った瞬間だった。

ところで、「他者との出会い」とは必ずしも「まなざし」だけによるわけではない。まなざしをその一部とする「身体そのもの」により、私たちは他者と出会うのである。例えば、子どもが私を見ていなくとも、身体所作などにより私に働きかけるなり応答してくれば、そのとき私は「保育者」になれるのである。したがって、保育者の生成を可能にするのは△子どもとの身体的出会い√である、と行うことができるだろう。

二、保育者へと生成すること

以上の考察より、次のように言うことができるだろう。

第一に、保育者とは事物のように存在しているのではなく、絶えず保育者へと生成して行く存在なのであり、そうでない限り保育者ではありえないのである。つまり、「生成の運動」の内にのみ保育者は存在するのである。

第二に、子どもとの出会いにより保育者存在が生成するのであるから、保育者は常に子どもとの出会いにおいて△自己の存在を賭けている√と言える。

第三に、私たちは「保育者」として生成しえているとき、「生きいきと行動する」ことができる。例えば、〔記録2〕で、保育者になりえた私は楽しい気分に包まれ、生きいきと活動していた。このとき私はS男の所有物として支配されていたのではなく、△私自身の主人公√となっていたと言える。すなわち、「保育者」であるとき、私たちは△主体的存在√として存在しうるのである。

第四に、保育者が「保育者」としてその主体性を発揮して存在しうるのは、子どもとの出会いによっている。

したがって、子どもは△主体的存在としての保育者存在の不可欠な契機▽である、と言える。

以上、保育者生成の過程とその意味を私の体験相に即して考察してきた。「子ども」と「保育者」が関係的存在である以上、ここで論じたことはそのまま子どもについても言える。すなわち、子どももまた△子どもへと生成する存在▽なのである。

(母子愛育会)

△注▽

(1) 哲学者の廣松渉は「実体」に対する「関係」の第一次性を説いている。すなわち、関係の発生によって初めて実体の存在が可能になるのである。 廣松渉『存在と意味』岩波書店 一九八二年 四六八頁

(2) 保育者を「役割を担った存在」と言うと、まるで保育者は遂行すべき義務として保育を行っているように思えるかも知れない。ここで言う「役割」とは「仕事」という狭い意

味ではなく、相手との関係により行われる社会的行動一般のことである。 廣松渉『物象化論の構図』岩波書店 一九八三年 二九〇、二九一頁を参照

(3) 廣松によると、「物象化」にはいくつかの意味があるのだが、そのうちの一つは、人間と人間との間主体的な関係が物の性質であるかのように見なされることである。注(2)と同書 六五、六六頁

(4) 小林敏明によれば、日常生活の社会的行動はほとんど関係が物象化された役割行動なのである。小林敏明『八ことなり▽の現象学』弘文堂 一九八七年 四六頁

(5) この考え方はメルロ＝ポンティに発するものである。私たちの「身体的存在」は「意識的主体」に先立って世界と交わっている。意識に先立つという意味で、身体的存在は「前意識的次元」のものである。「世界と前意識的に交わる」ということは、「世界と渾然一体となっている」ということである。クワント(滝浦・竹本・箱石)『メルロ＝ポンティの現象学的哲学』国文社 一九七六年 四六、五八頁を参照